

ナガラ原東貝塚出土貝符の編年的位置づけ

山野ケン陽次郎
鹿児島大学

YAMANO Kenyojiro
Kagoshima University

はじめに

貝符は、アンボンクロザメ *Conus litteratus* やクロフモドキ *C.leopardus* などの大形イモガイ科の体層部を用いて作られた扁平板状の貝製品である。その外形は左右対称を基本形とし、方形状のものや、周囲にU字、V字状の抉りを施して蝶形に整形したものなど多種多様である。また、製品表面に擦刻¹⁾による線刻や、緻密な彫刻が施されたもの、無文のものが見受けられ、その文様もヴァリエーションに富む。さらに、有孔と無孔の製品が認められ、装飾品としてだけでなく墓に副葬するなど、葬具として用いられた貝符も存在する。これらは現段階では大隅諸島から沖縄諸島に集中して分布するため、先史時代の琉球列島において特徴的な貝製品といえる。

ナガラ原東貝塚では貝符とこれに関連する資料が計6点得られた。本論では本遺跡出土貝符の編年的位置づけを行なうことを目的とする。そこでまず貝符の研究史をまとめ、貝符研究の重要性を述べる。次に琉球列島で出土する広田下層タイプ貝符を集成し、その一覧表、分布図、実測図を示す。ここから全体の様相を把握し、当遺跡出土品との比較や出土状況の検証を行い、年代観について検討する。これによりナガラ原東貝塚出土貝符の編年的位置づけを行い、その研究上の価値を述べる。

1. 研究略史

1.1 南種子町広田遺跡の発掘調査

貝符は鹿児島県南種子町広田遺跡における出土例が初出である。種子島南東の海岸砂丘上に形成された埋葬址である広田遺跡では、1957年の第一次発掘調査の際に上層、中層、下層の3つの文化層が確認された(国分・盛園1958)。各文化層中の埋葬人骨には貝符を含む大量の貝製品が共伴しており、これらを用いた考古学的研究が見込まれた。しかし、当初はこの出土状況を活かした貝符の型式学的研究は進展せず、むしろ広田遺跡の文化起源の考察が活発となる。とくに広田遺跡における饜餐文類似文様や「山」の字状文様を持つ貝符、竜佩状貝製品などの存在は、古代中国から種子島への文化伝播を想起させた(金関1975)。広田遺跡の発掘以後、中種子町鳥ノ峯遺跡(橋口編1996)や奄美市サウチ遺跡(河口他1978)、伊江村ナガラ原西貝塚(名嘉他編1979)など、琉球列島各地で広田遺跡出土品と類似した貝符が確認された。これに対し九州以北には分布しないことから、貝符は琉球列島に特徴的な貝製品として認識されるようになった。

1.2 貝符の型式学的研究の開始

貝符の型式学的研究は1980年代に木下尚子を中心に開始された。木下は広田遺跡の上層埋葬に伴う貝符を分類し、これらを各出土遺構に対応させ、一括性を重視した蓋然性の高い文様変化の方向性を導き出している(木下1987、図1)。結果として、上層の貝符文様に簡略化が認められることや貝符がいくつかの系統を持つことを明らかにした。また、木下は貝符の形態と文様の両方に着目し、形態変遷を示すとともに貝符の系譜について考察を行なっている(木下1992、図2)。この際、貝符は南島において縄文時代から続く蝶形意匠を持つ「南島の文物」であるとしたが、広田遺跡においては文様が重要であり、蝶形意匠はあくまでその受け皿であると述べている。一方で、中園聡は広田遺跡の

基群	I		II		III
	A	B	A	B	
7					
6					
5					
4					
3					
2					
1					

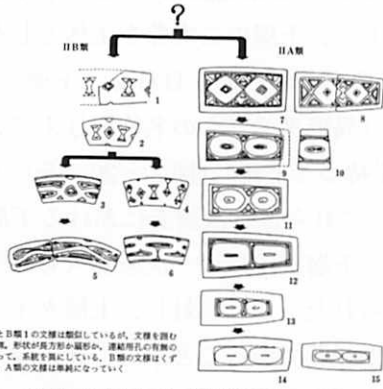


図1 広田上層タイプ貝符の分類と文様変化 (木下1987)

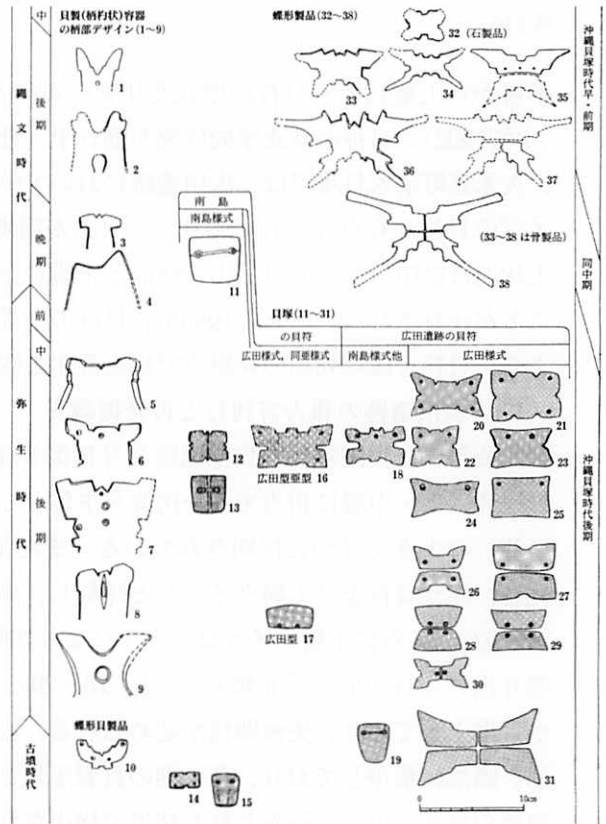


図2 南島の蝶形意匠と貝符・貝匙・蝶形骨器 (木下1992)

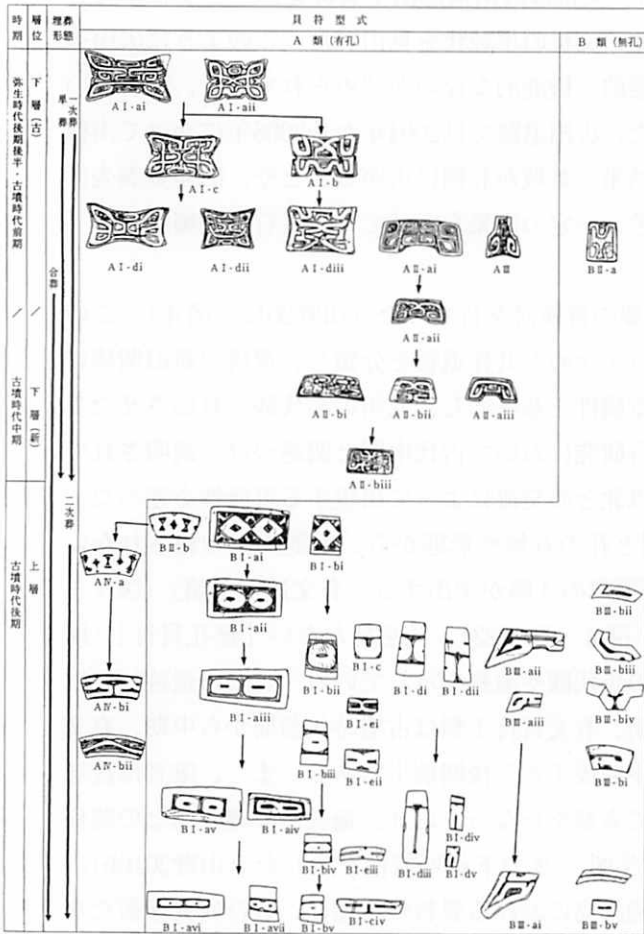


図3 広田遺跡出土貝符編年図 (矢持2003)

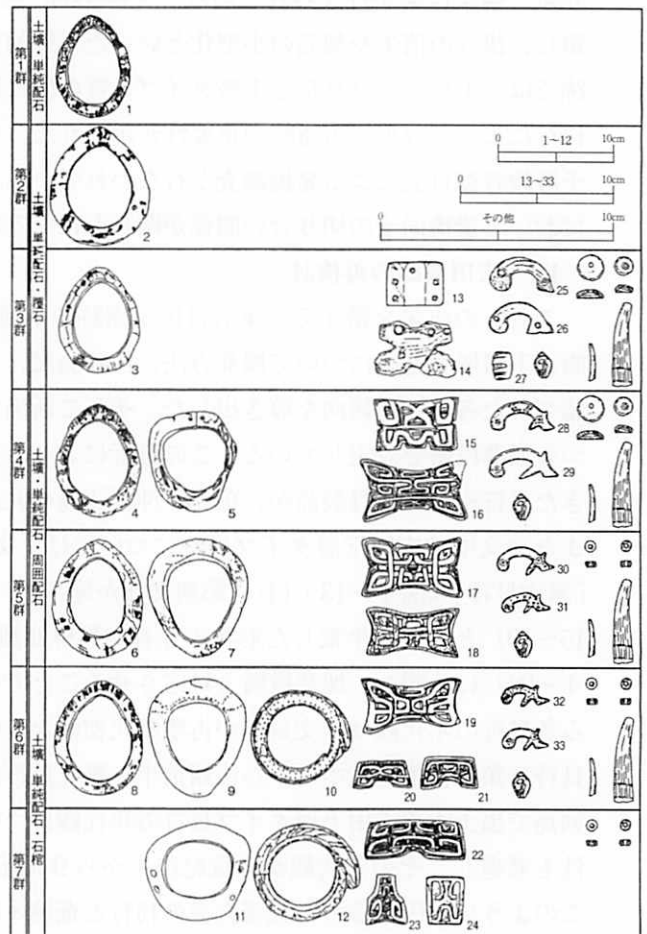


図4 広田遺跡下層埋葬群図 (山野2012)

下層から上層に伴う貝符の型式変化を一系列と仮定し、複数の属性を尺度とした編年を組み立てた(中園1992)。貝符の型式学的研究が進む中、奄美・沖縄諸島での貝符の出土例も増加してきた。とくに久米島町清水貝塚では、広田遺跡において中層埋葬に伴うタイプの貝符が5点、上層埋葬に伴うタイプの貝符が6点得られており、これらが間層を挟んで出土した(盛本編1989)。当遺跡の貝符の出土状況は広田遺跡における出土傾向と矛盾がなく、沖縄諸島においても貝符の新旧関係が確認されたことが注目される。これら1980年代以降の型式学的研究の進展や奄美・沖縄諸島における資料増加により、貝符を琉球列島の枠組みで捉え直す必要性が出てきた。

1.3 広田遺跡の報告書刊行と再発掘調査

2003年には1950年代の広田遺跡の発掘調査報告書が刊行された(桑原編2003)。この中で広田遺跡の埋葬は下・中層に相当する一次葬を主体とした「下層埋葬」と、上層の二次葬を主体とした「上層埋葬」の大きく2つに区別されている。また報告書中で木下は、前者に伴う貝符を「下層タイプ」、後者に伴う貝符を「上層タイプ」と呼称し、無文の貝符には「異形タイプ」の名称を与えている(木下2003)。さらに下層タイプは、木下により四隅に張り出しを持つ「i類」(図2-20~25)と二隅に張り出しを持つ形の「ii類」(図2-26~29)に細分された。これらは1次調査における下層と中層から出土しており、先後関係が認められる。広田遺跡において下層タイプは一次埋葬人骨の手首、頸部、頭部に集中しており、その他の貝製玉類と連結して用いられた。これに対し、上層タイプは二次埋葬の集骨の周辺に散布された状態で検出されており、多くが無孔であることから、装飾品ではなく明器的な役割を果たした葬具の一種として捉えられる。また、報告書内では矢持久民枝による貝符の分類と編年作業が行なわれている(矢持2003、図3)。矢持は広田遺跡出土貝符を形態と文様から分類し、抉りの消失や製品の小型化といった形態的变化、文様の単純化を見出した。このように広田遺跡では、下層タイプ貝符と上層タイプ貝符の間に形態的、機能的な違いが認められており、報告書の刊行によって改めて当遺跡の重要性が示された。また、広田遺跡では2004年から2006年にかけて南種子町教育委員会による発掘調査が行なわれている。結果、墓域が北側に広がることや、旧発掘調査区において遺構同士の切り合い関係が明らかになるなど、一定の成果を上げている(石堂他編2007)。

1.4 広田遺跡の再検討

これらの成果を踏まえて筆者は広田遺跡の下層埋葬の再検討を行なった(山野2012、図4)。この際、下層埋葬遺構について埋葬方法、埋葬施設、貝符を含めた共伴遺物を分類し、遺構の新旧関係に基づいた各属性の傾向を導き出した。そして新出する属性を基準とし、九州の年代観と対応させた7つの埋葬段階を設定している。この分析により、先行研究において古代中国と関連づけて説明されてきた貝符や竜佩状貝製品が、奄美・沖縄諸島や九州以北との交流によって出現する可能性を述べた。また論文中で広田下層タイプ貝符については、文様と孔の有無や形態から、彫刻文様の施されない「無文貝符」(図4-13・14)、彫刻文様が施され、平面形の4隅が突出する「有文貝符Ⅰ類」(図4-15~19)とⅠ類を半裁した形状の「有文貝符Ⅱ類」(図4-20~23)、孔を持たない「無孔貝符」(図4-24)に分類し、埋葬段階と対応させることでその年代観や消長を示している⁽²⁾。広田遺跡における各貝符の年代観は無文貝符が古墳時代初頭から中期、有文貝符Ⅰ類は古墳時代前期から中期、有文貝符Ⅱ類は古墳時代中期から後期前半、無孔貝符は中期後半から後期前半である。また、筆者は琉球列島で出土する広田上層タイプ貝符の年代観について考察を行っており、奄美・沖縄諸島との関係性も考慮し、その年代観が6世紀後半から9世紀前半頃⁽³⁾まで下る可能性を示した(山野2010b)。このように広田遺跡の正式報告書の刊行と奄美・沖縄諸島における資料の増加は、貝符研究を新たな段階に押し進めている。

表 1 琉球列島出土広田下層タイプ貝符一覧表

No.	遺跡名	島嶼名	島名	市町村	出土状況	主な土器	貝符分類				紐 ず れ 痕 跡	文 献	調 査
							有文		無文				
							有扶	無扶	有扶	無扶			
1	烏ノ峯遺跡	大隅諸島	種子島	中種子町	人骨共伴	新里Ⅳ期土器	4				×	橋口編 1997	◎
2	広田遺跡	大隅諸島	種子島	南種子町	人骨共伴、表面採集	新里Ⅳ～Ⅵ期土器	65	32	7	5	○	桑原編 2003	◎
3	サウチ遺跡	奄美諸島	奄美大島	奄美市	表面採集	沈線文脚台系、弥生系、中津野式?	1				○	河口他 1978	◎
4	長浜金久第Ⅲ遺跡	奄美諸島	奄美大島	奄美市	包含層	沈線文脚台系、免田式				1	○	旭・弥栄編 1987	◎
5	イヤンヤ洞穴	奄美諸島	奄美大島	奄美市	不明	瓜形文系、条痕文系、弥生系				1	○	高宮・知念編 2004	◎
6	屋鈍遺跡	奄美諸島	奄美大島	宇檢村	包含層	沈線文脚台系、くびれ平底系			1		×	西園編 2009	◎
7	喜念貝塚	奄美諸島	徳之島	伊仙町	表面採集	肥厚口縁系、無文尖底系				1	×	新里・山野 2008	◎
8	具志原貝塚	沖縄諸島	伊江島	伊江村	包含層、攪乱層	無文尖底系、免田式		1	1	1	○	沖縄県 1985	◎
9	ナガラ原東貝塚	沖縄諸島	伊江島	伊江村	包含層	無文尖底系、くびれ平底系		1		1	○	本尓	◎
10	ナガラ原西貝塚	沖縄諸島	伊江島	伊江村	包含層	無文尖底系			1	2	○	名嘉他編 1979	◎
11	浜崎貝塚	沖縄諸島	伊江島	伊江村	包含層	無文尖底系				1	×	金武・大城編 1980	◎
12	大堂原貝塚	沖縄諸島	屋我地島	名護市	表面採集	貝塚前期～後期土器		1			×	沖縄県考古学会編 2004	◎
13	宇堅貝塚	沖縄諸島	沖縄本島	うるま市	表面採集	無文尖底系、入来式				1	×	具志川市編 1978	◎
14	地荒原貝塚	沖縄諸島	沖縄本島	うるま市	不明	肥厚口縁系				1	?	多和田他 1962	○
15	アカジャンガー貝塚	沖縄諸島	沖縄本島	うるま市	包含層	無文尖底系、山ノ口式			2		○	金武編 1980	◎
16	平敷屋トウバル遺跡	沖縄諸島	沖縄本島	うるま市	包含層	無文尖底系		1	1		○	島袋編 1996	◎
17	津堅貝塚	沖縄諸島	津堅島	うるま市	包含層	無文尖底系、くびれ平底系				1	○	宮城・東富編 2005	◎
18	二重兼久原貝塚	沖縄諸島	沖縄本島	読谷村	盛土	無文尖底系			4	1	○	高宮・知念編 2004	◎
19	野国貝塚	沖縄諸島	沖縄本島	嘉手納町	表採	無文尖底系				1	○	上原 1985	◎
20	クマヤー洞穴遺跡	沖縄諸島	沖縄本島	北谷町	埋葬共伴	肥厚口縁系				1	×	中村 1994	◎
21	安座間原第 1 遺跡	沖縄諸島	沖縄本島	宜野湾市	不明	貝塚前期～後期土器				2	○	高宮・知念編 2004	◎
22	安座間原第 2 遺跡	沖縄諸島	沖縄本島	宜野湾市	不明	無文尖底系		1			○	高宮・知念編 2004	◎
23	熱田原貝塚	沖縄諸島	沖縄本島	知念村	包含層?	点刻文系、肥厚口縁系				2	?	木下 1996	△
24	前川貝塚	沖縄諸島	沖縄本島	南城市	表面採集	無文尖底系?			1		?	南島考古だより	△
25	古座間味貝塚	沖縄諸島	座間味島	座間味村	表面採取	点刻文系、肥厚口縁系、無文尖底系		1			○	沖縄県 1982	◎
26	北原貝塚	沖縄諸島	久米島	久米島町	表面採集	無文尖底系				1	×	沖縄県 1992	◎
27	清水貝塚	沖縄諸島	久米島	久米島町	包含層	無文尖底系、くびれ平底系		5			○	盛本編 1989	◎

※「調査」の中で「◎」は筆者が実測を行ったもの、「○」は実見したが実測していないもの、「△」は実見していないが文献中に図か写真の掲載されているものである

※「主な土器」は、大隅諸島を新里 1999、奄美・沖縄諸島を伊藤 2008、新里 2008 を参照とした

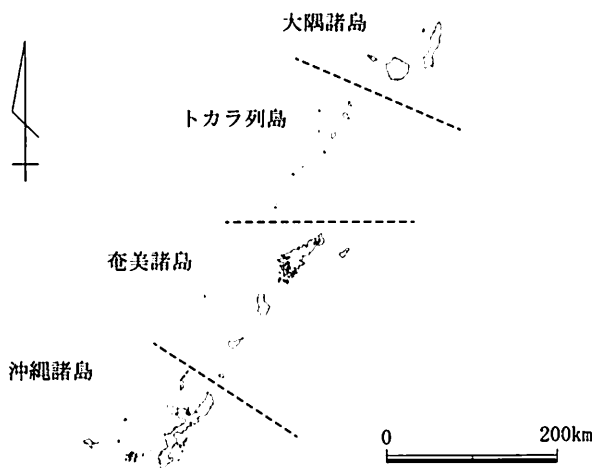
※「No.」は図 5 の分布図の番号に対応している

※ 地荒原貝塚や熱田原貝塚などは年代的観点から厳密には広田下層タイプ貝符と呼べないが素材的、形態的に類似しており、広義の貝符として集成に加えた

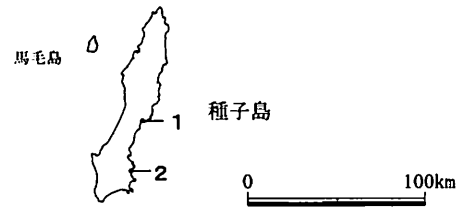
2. 貝符研究の重要性

貝符の研究は以下の 2 点においてとくに重要である。まず、貝符は年代の指標として重要性が高いといえる。沖縄諸島において貝塚時代後期は無文尖底系土器を主体とする前半と、くびれ平底系土器を主体とする後半の大きく 2 つに分かれる。しかし、当該時期の遺跡は外洋に面した海岸砂丘上に立地することが多いため、その遺物包含層は安定的といえない。また、土器の型式変化が緩慢で細分が困難なことから遺跡や各包含層の年代を決定することが難しい。中でも無文尖底系土器の一つである大当原式土器の年代観は弥生時代後期後半から古墳時代に相当するなど、一土器型式が長期にわたり存続しており、本土も含めて奄美諸島以北からの搬入土器がほぼ認められない上に、大隅諸島、奄美諸島、沖縄諸島の各地域で在地性の強い土器型式が排他的に展開することから、広域での年代的並行関係を捉えることが困難な状況にある。この点において貝符は、大当原式土器からくびれ平底系土器の時期にかけてとくに盛行する貝製品であり、大隅諸島から奄美・沖縄諸島までの広い範囲に分布する。そのため、貝符の編年が充実すれば、広田遺跡あるいは九州以北の年代観を沖縄諸島と対応させることが可能となってくる。二つ目は先史琉球列島における貝文化の展開を考える上で重要である。貝符は九州以北にはほぼ認められず、琉球列島に特徴的な文物といえる。しかし、その出現背景は現段階でも判然とせず、広田遺跡にみられる文様の起源も解明されていない。広田遺跡が再評価され奄美・沖縄諸島の資料が増加したことにより、貝符の展開はより具体的になりつつある。以下、本稿で

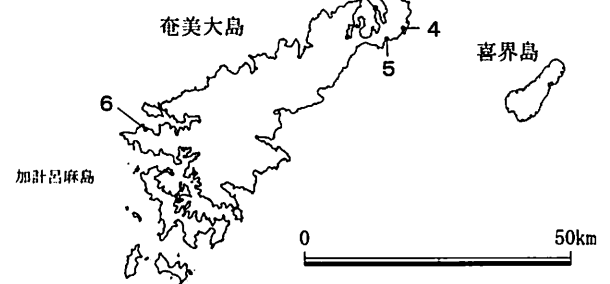
琉球列島



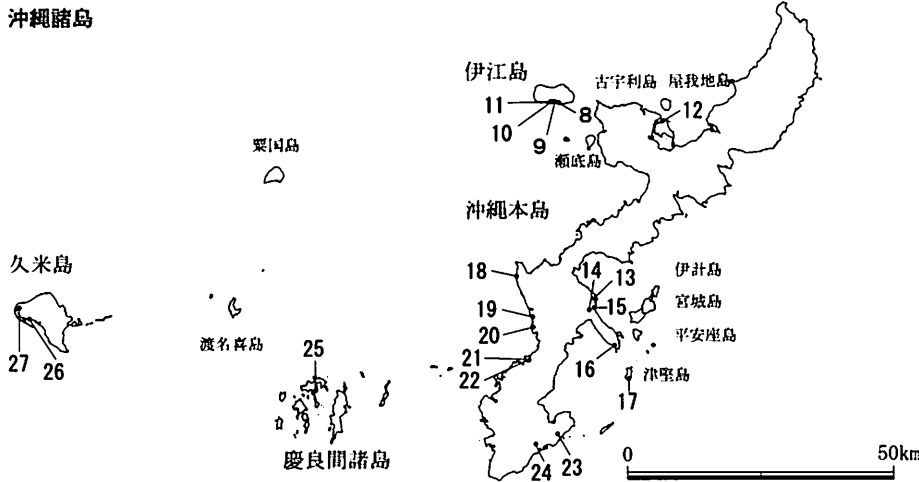
大隅諸島



奄美諸島①



沖縄諸島



奄美諸島②

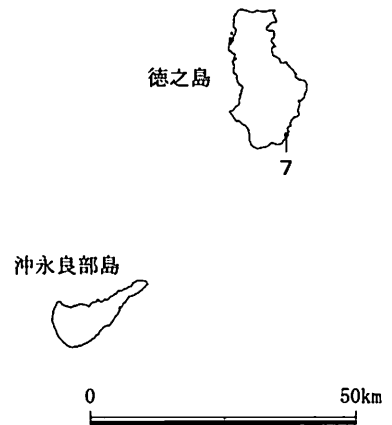


図5 琉球列島出土広田下層タイプ貝符分布図

(図の番号は表1のNo.に対応している)

は広田下層タイプ貝符の全体像を把握することを目的の一つとし、集成を行い、分布や時期的傾向についてまとめることで貝符研究の一助としたい。

3. 広田下層タイプ貝符

3.1 琉球列島出土広田下層タイプ貝符の概要

広田下層タイプ貝符⁽⁴⁾の集成を行ったところ、琉球列島において27遺跡で155点が確認できた(表1・図5)。分布は大隅諸島の種子島を北限とし⁽⁵⁾、奄美大島、徳之島、沖縄本島と屋我地島、伊江島、津堅島、座間味島、久米島に広がる。管見の限りトカラ列島や沖永良部島、与論島、先島諸島では確認できなかった。種子島の広田遺跡や鳥ノ峯遺跡では埋葬人骨に伴って出土しており、頸部や手首付近からまとめて出土するなど、着衣状況の明らかなものが多い。これに対し、奄美・沖縄諸島では砂丘上に堆積した遺物包含層から出土することがほとんどで、使用状況は不明確である。ただし、奄美・沖縄諸島の貝製品には孔の周囲に紐ずれ痕跡が認められるものが数多く存在する(表1、図6-4・6・15~21・33・44・45)。このことから、多くの貝符が廃棄される以前に、孔へ紐を通して使用されていたことが分かり、機能においては種子島の貝符と大きな違いはなかったと想定できる。

琉球列島の広田下層タイプ貝符を概観すると両者は2つの視点から大きく4つに分類できる。一つは彫刻文様の有無であり、彫刻が施される有文具符（図6-6~8、23~25、41~49）と施されない無文具符（図6-1~5、9~22、26~40）がある。貝製品への彫画行為は加工痕跡からみると、琉球列島において縄文時代後期並行期以降に多用される擦切具を用いた擦刻によるものと（図6-19・21・36）、古墳時代並行期以降に認められる鉄製利器を用いた彫刻による文様の大きく2つに分けられる（山野2010a）。これは広田遺跡において下層埋葬第3段階と第4段階の間に認められる違いでもあり、両者は貝製品の製作技術面で大きく異なる。また、もう一つは形態的差異に着目した分類概念である。下層タイプ貝符は、周囲に抉りの施される有抉タイプ（図6-1~22）と施されない無抉タイプ（図6-23~49）の2種が存在する。広田遺跡では貝符出現時期の下層埋葬第3段階には、すでに両タイプが認められる。この有抉タイプにはU字状の抉りを多用したものや（図6-1~8）、大小のV字あるいはW字状の抉りを施したものがある（図6-9~22）。また、無抉タイプには長方形あるいは台形に近いものが多く認められ、隅丸方形のもの（図6-32・33）、下辺のすぼまるもの（図6-27・39・40）、横長台形状（図6-41~49）などヴァリエティーに富んでいる。また、貝符に施される孔は全て回転穿孔によるもので、2あるいは4個施されることが多い。さらに、孔と孔の間に紐通し用の溝を設けたものが複数点認められる（図6-2・17・19・26~29・31・32・39）。この他、無文具符の多くには縦あるいは横方向に稜線が走り、2または3面の研磨面を持つ点が共通する特徴といえる（図6-1~4、10~21・27~30・33・37・39・40）。

広田遺跡では有文具符が9割、無文具符が1割認められ、有文具符の割合が圧倒的に多い。一方、奄美・沖縄諸島では有文具符が3割、無文具符が7割で、無文具符が主となり広田遺跡の状況と異なる。貝符は、現在のところ両地域に挟まれたトカラ列島が分布の空白となっており、広田遺跡と奄美・沖縄諸島の貝符にも上記のような傾向の違いが確認できる。しかし、広田遺跡と奄美・沖縄諸島の貝符は、素材や形態に限らず、孔の位置や数、紐通し溝、複数の研磨面など類似点がいくつも存在しており、両者に強い関連性が認められるのである。

3.2 大隅諸島

続いて各諸島における貝符の概要をみていく。大隅諸島では種子島の鳥ノ峯遺跡と広田遺跡の2遺跡で113点の広田下層タイプ貝符が出土している。このうち広田遺跡には様々な形態の貝符が存在し、有文具符と無文具符にそれぞれ有抉タイプと無抉タイプが認められる（図4）。数が豊富で、埋葬人骨に伴った一括資料も多いため、新旧関係を把握することが可能で、形態的な変化を看取できる（図2~4）。また、鳥ノ峯遺跡でも4点の有文具符が埋葬人骨に伴って出土している（図6-7・8）。種子島における貝符の盛行時期を考察すると、広田遺跡で貝符が出土する埋葬区域に新里編年のIV~VI期の土器が散在する点から、広田下層タイプ貝符は、おおよそ古墳時代前期には存在していた可能性がある（新里1999）。また、広田遺跡における貝符の出現時期は下層埋葬段階の第3段階にあたり、古墳時代初頭~前期前半には無文具符が出現する（図4-13・14）。種子島では鳥ノ峯遺跡の第2・3次調査発掘区で免田式土器や中津野式土器が覆石墓に伴う他、広田遺跡の南区では中津野式土器が覆石墓に伴って出土する傾向がある（新里2005、石堂他編2007）。しかし、これら搬入土器を供献した埋葬遺構に貝符は伴わない。この共伴しない状況こそが、種子島における貝符の上限を表していると思われる。

3.3 奄美諸島

奄美諸島では広田下層タイプ貝符が5遺跡で5点出土している。奄美市長浜金久第Ⅲ遺跡では沈線文脚台系土器や免田式土器の包含層から無文具符が出土した（旭他編1987、図6-30）。また、奄美

第Ⅱ部

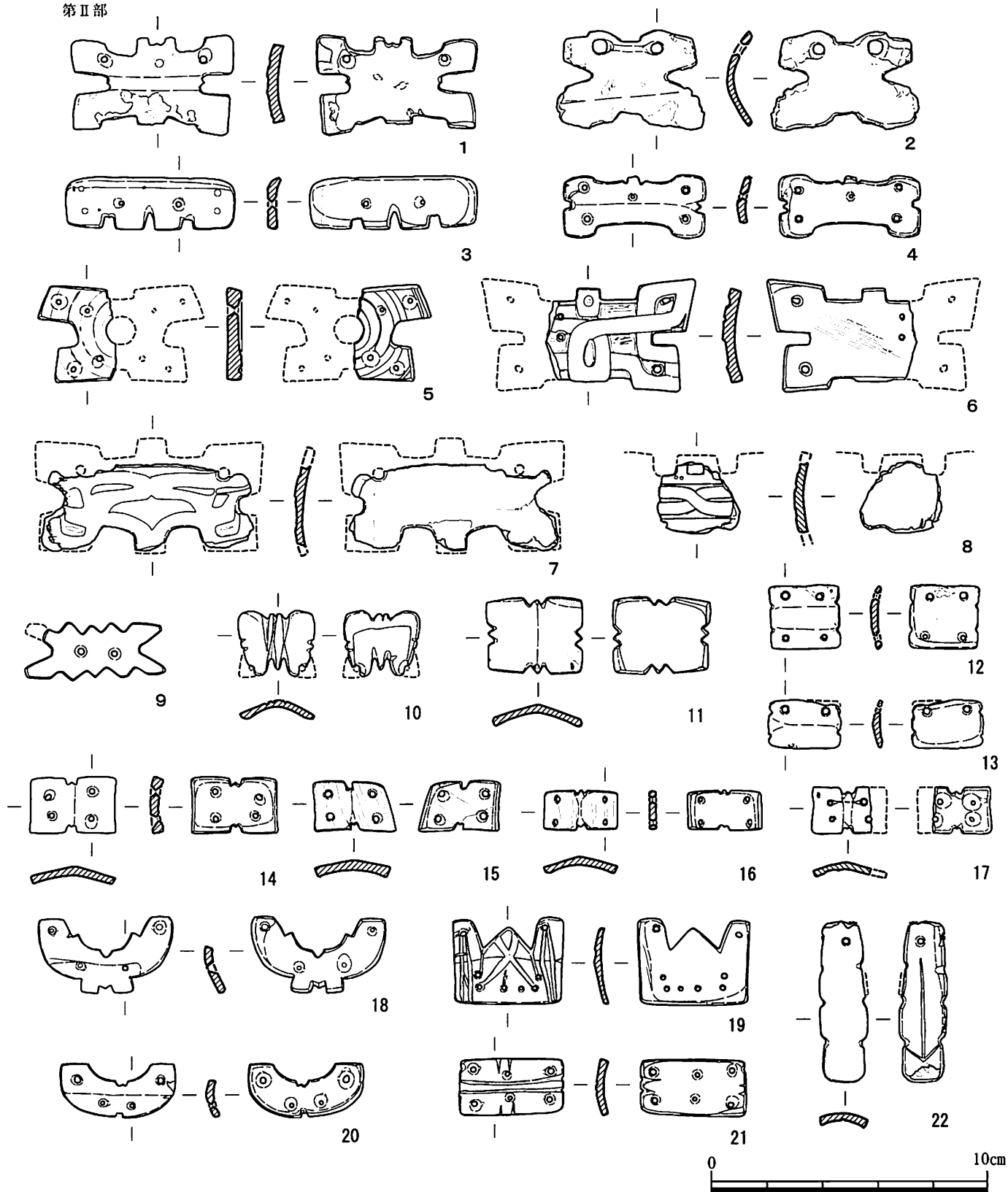


図6 琉球列島出土広田下層タイプ貝符実測図①

1～3・12・13・27・34・37：広田遺跡 4・24：平敷屋トウバル遺跡 5・14・19・21・29：二重兼久原貝塚 6：サウチ遺跡
 7・8：鳥ノ峯遺跡 9：熱田原貝塚 10：喜念貝塚 11・28・31：ナガラ原西貝塚 15：野国貝塚 16・23：具志原貝塚
 17：津堅貝塚 18・20：アカジャンガー貝塚 22：北原貝塚 25：古座間味貝塚 26：地荒原貝塚 30：長浜金久第Ⅲ遺跡
 32・39：安座間原第1遺跡 33・42：ナガラ原東貝塚 35：浜崎貝塚 36：イヤンヤ洞穴 38：クマヤー洞穴遺跡
 40：宇堅貝塚 41：屋鈍遺跡 43：大堂原貝塚 44～48：清水貝塚 49：安座間原第2遺跡

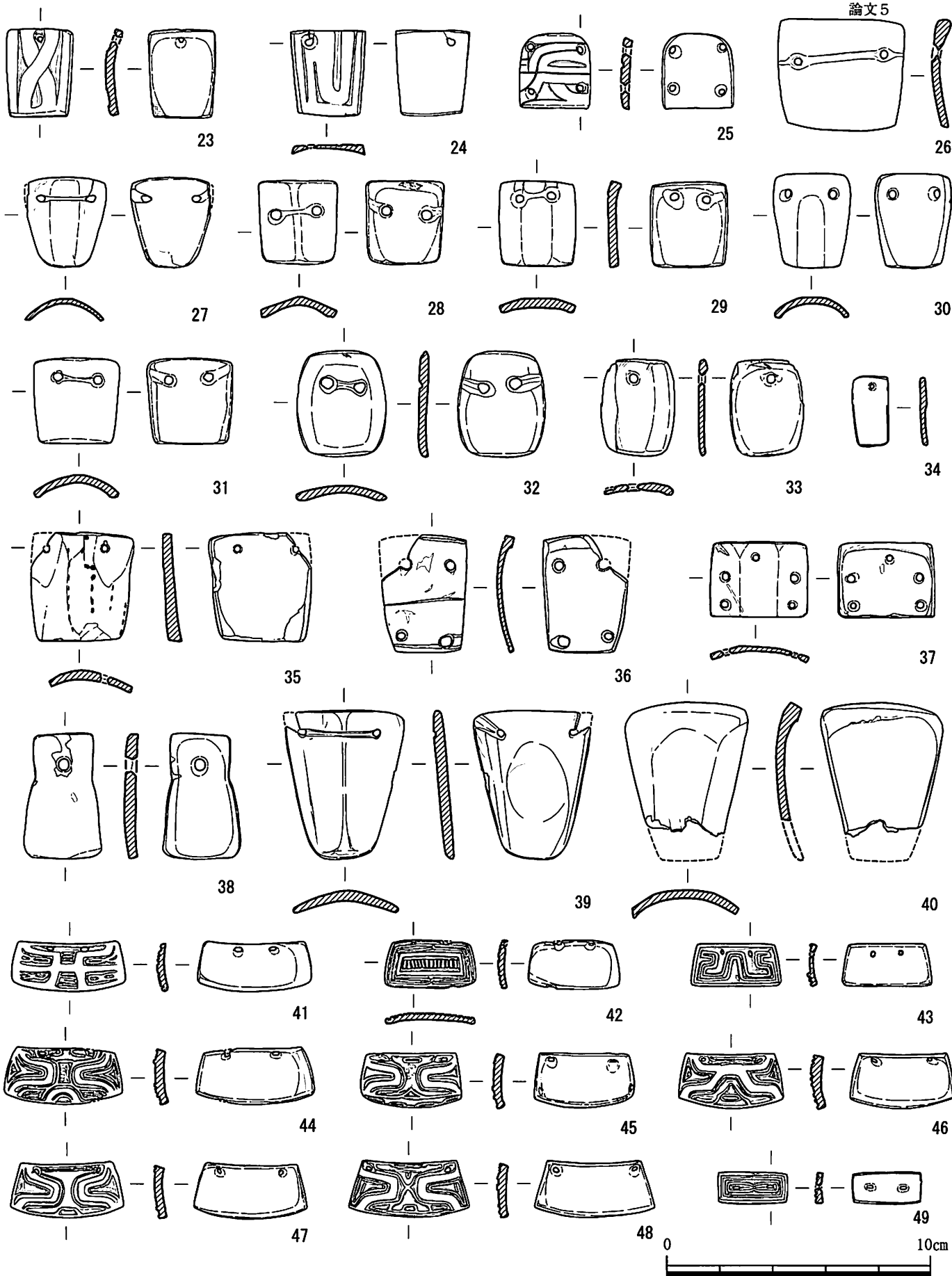


図6 琉球列島出土広田下層タイプ貝符実測図②

市サウチ遺跡では、沈線文脚台系土器や中津野式土器の包含層崖露出面から有文具符Ⅰ類が表面採集されている（河口他1978、図6-6）。さらに、近年調査された宇検村屋鈍遺跡では沈線文脚台系土器が主体の文化層とくびれ平底系土器を主体とする文化層の間の層から有文具符が出土している（西園編2009、図6-41）。この有文具符は報告では広田遺跡上層の貝符との関係性が述べられている。しかし、横長台形の上辺に2孔を持つ特徴は、むしろ広田遺跡の下層埋葬の第6・7段階の貝符と同様であり（図2-26~29、図4-20~22）、上層タイプ貝符にはみられない特徴である。清水貝塚出土品（図6-44~48）とも同様の形態であり、当製品は広田下層タイプの有文具符Ⅱ類に相当し、古墳時代中期から後期の資料と推察できる。奄美大島では広田下層タイプの無文具符や有文具符が沈線文脚台系土器、免田式土器、中津野式土器の時期に認められる。資料が少なくさらなる検証が必要だが、奄美大島では弥生時代後期後半~古墳時代初頭には貝符が出現した可能性があり、種子島とほぼ同時期か若干先行することが注目される。また、奄美大島では兼久式土器を代表とするくびれ平底系土器の段階に、奄美市マツノト遺跡（樋泉他編2006）や同市フワガネク遺跡（高梨編2007）など5遺跡で広田上層タイプ貝符が確認されており、広田遺跡と同様、下層タイプと上層タイプの先後関係が認められる。

3.4 沖縄諸島

沖縄諸島では広田下層タイプ貝符が19遺跡から36点出土している。ナガラ原東貝塚の所在する伊江島では、具志原貝塚（図6-16・23）やナガラ原西貝塚（図6-11・28・31）、浜崎貝塚（図6-35）などで出土しており、多くが無文尖底系の大当原式土器を主体とする包含層中で検出された。また、久米島町清水貝塚では無文尖底系土器主体の包含層から有文具符Ⅱ類が5点出土しており（図6-44~48）、分布の南限を示す。注目すべきは沖縄本島の北谷町クマヤー洞穴遺跡（図6-38）やうるま市地荒原貝塚（図6-26）、知念村熱田原貝塚（図6-9）の資料である。これらは縄文時代並行期の点刻文系土器や肥厚口縁系土器が主体の遺跡であり、広田遺跡で貝符が出現する以前にイモガイ科製板状装飾品が存在した点は注視すべき点である。広田遺跡出土貝符との直接的関係を探るには注意が必要だが、抉りの加工や紐通し溝など共通する点があり、このような扁平板状で左右対称の貝製品が貝塚時代の早い時期からすでに認められることは重要である。うるま市アカジャンガー貝塚でも抉りを多用した特徴的な無文具符（図6-18・20）が無文尖系土器や山ノ口式土器が出土する包含層から検出されており、沖縄諸島では縄文時代から弥生時代並行期にかけて、貝符に類する製品がすでに散見できる。また、清水貝塚で下層タイプ貝符と上層タイプ貝符の上下関係が明確となっており、その他の遺跡でも下層タイプ貝符が無文尖底系土器の包含層から出土する一方、上層タイプ貝符がくびれ平底系土器の包含層から出土するなど、資料の増加によって沖縄諸島においても両者の先後関係は明確となってきている。

3.5 小結

琉球列島における広田下層タイプ貝符を概観したところ、広田遺跡での埋葬開始以前に、沖縄諸島では縄文時代並行期から無文具符の有抉タイプや無抉タイプに相当する貝製品が存在したことがわかった。この点は木下も着目しており、縄文時代から弥生時代並行期にかけて骨製品やヤコウガイ製匙に抉りを用いた蝶形の造形が確認され、その関連性が述べられている（図2、木下1992）。広田遺跡や奄美・沖縄諸島の出土傾向から、貝符の使用は弥生時代後期後半~古墳時代初頭に本格的に開始すると考えられる。しかし、その雛形はすでに奄美・沖縄諸島に存在していた可能性が高い。広田遺跡の第3段階には貝符だけでなく、獣牙状貝製品や円盤状貝製品、サツマビナ製玉類など、種子島在地の伝統にない貝文化が突如として出現している。使用される貝種には種子島において生息しないも

の、あるいは十分な産出量の得られない貝種もあり、これらは奄美・沖縄諸島から入手されたと考えるのが妥当である。また、大隅諸島と奄美・沖縄諸島の下層タイプ貝符は形態だけでなく、孔の位置や数、紐通し溝、複数の研磨面などの細かい加工も共通している。このことから弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけて大隅諸島と奄美・沖縄諸島との間での装飾文化を共有するほどの交流があったことがうかがえるのである。

4. ナガラ原東貝塚出土貝符の分析

4.1 所見と比較

ナガラ原東貝塚からは完成品とみられる貝符が5点得られている。また、貝符の未成品とみられるアンボンクロザメ製品が1点出土している。以下、各遺物の所見をまとめる。

図7-1は第8次調査における表面採集品である(柴田編2012)。完形品で横長台形状を呈しており、法量は長さ9.5mm、幅15.5mm、厚さ1~2.5mm、重さ0.7gである。外形に沿って周囲に深さ0.5mm程度の線刻を施すことで中央部に1条の帯文が残る。全体はわずかに摩耗しているが、文様の加工痕跡は明瞭であり、下辺では利器を用いて複数回削ることで1条の線刻が施されている。当製品は無孔であり、広田上層タイプに類するが、形態や加工痕跡は広田下層タイプに似る部分がある。また、木下や矢持の分類に当てはめることができない資料である。

図7-2は第8次調査における表面採集品である(柴田編2012)。半欠品だが、残存部分から図7-3と形態的に類似した製品と推察できる。残存部分の法量は長さ21.5mm、幅14mm、厚さ2mm、重さ1.3gである。表面には深さ0.5mm以下の線刻によって文様が施されており、中央に長さ4mm程度の横位の線刻が1条、その上部には2条の並行した線刻が走る。また製品表面中央部に縦位の稜線が明瞭に走り、断面形態が山形を呈する点も図7-3と同様である。当製品は形態や文様から広田上層タイプに含まれ、木下分類のⅡA類、矢持分類のBⅠ-b類に相当する。

図7-3は第6次調査における表面採集品である(高松他編2010)。ほぼ完形品で縦長台形状を呈しており、法量は長さ37mm、幅16~20mm、厚さ2~4mm、重さ7gである。表面には深さ0.5mm程度の線刻により文様が施され、中央に7mm程度の横位の線刻が1条、その上下にそれぞれ2条の線刻が走っており、製品端部には2条の刻線の間を充填するように三角文が施される。また、製品表面中央部には縦位の稜線が明瞭に走っており、断面形態は山形を呈する。全体的に状態がよく、側縁部には研磨痕跡が明瞭に残る。当製品は広田上層タイプに含まれ、木下分類のⅡA類、矢持分類のBⅠ-b iii類に相当する。同タイプの資料は広田遺跡の他に、伊江村具志原貝塚でも出土しているが、中央に稜線を施す加工は認められない。

図7-4は第3次調査の際、北3西1グリッドのⅣ層から出土した(新里編2001)。当製品は縁辺が2カ所わずかに欠けるが全体的に状態が良く、表面は滑らかである。平面形は横長の隅丸台形を呈しており、法量は長さ30~35mm、幅18mm、厚さ2mm、重量3gである。表面には鋭利な利器による細かな彫刻文様が施されている。文様は製品の外形に沿った4条の帯文を主体として構成されており、このうち2条は製品の中央上下で立体的に交差する。また、最も内側の帯文は他の帯文と比べてわずかに幅が広く、製品中央には14条の連続的な縦位の帯文が刻まれている。製品上端には外側2条の帯文を避けるようにして、裏面からの片側穿孔による孔が2カ所施される。この孔付近の上辺とその対称に位置する下辺の一部が欠けているが、下辺は破損後に研磨が施されており、この再加工により文様が一部欠けている。一方、上辺の欠損は再研磨されておらず、この破損が製品を破棄した理由とも考えられる。孔の周囲に明確な紐ずれ痕跡は認められないが孔付近の破損が当製品を使用した可能性

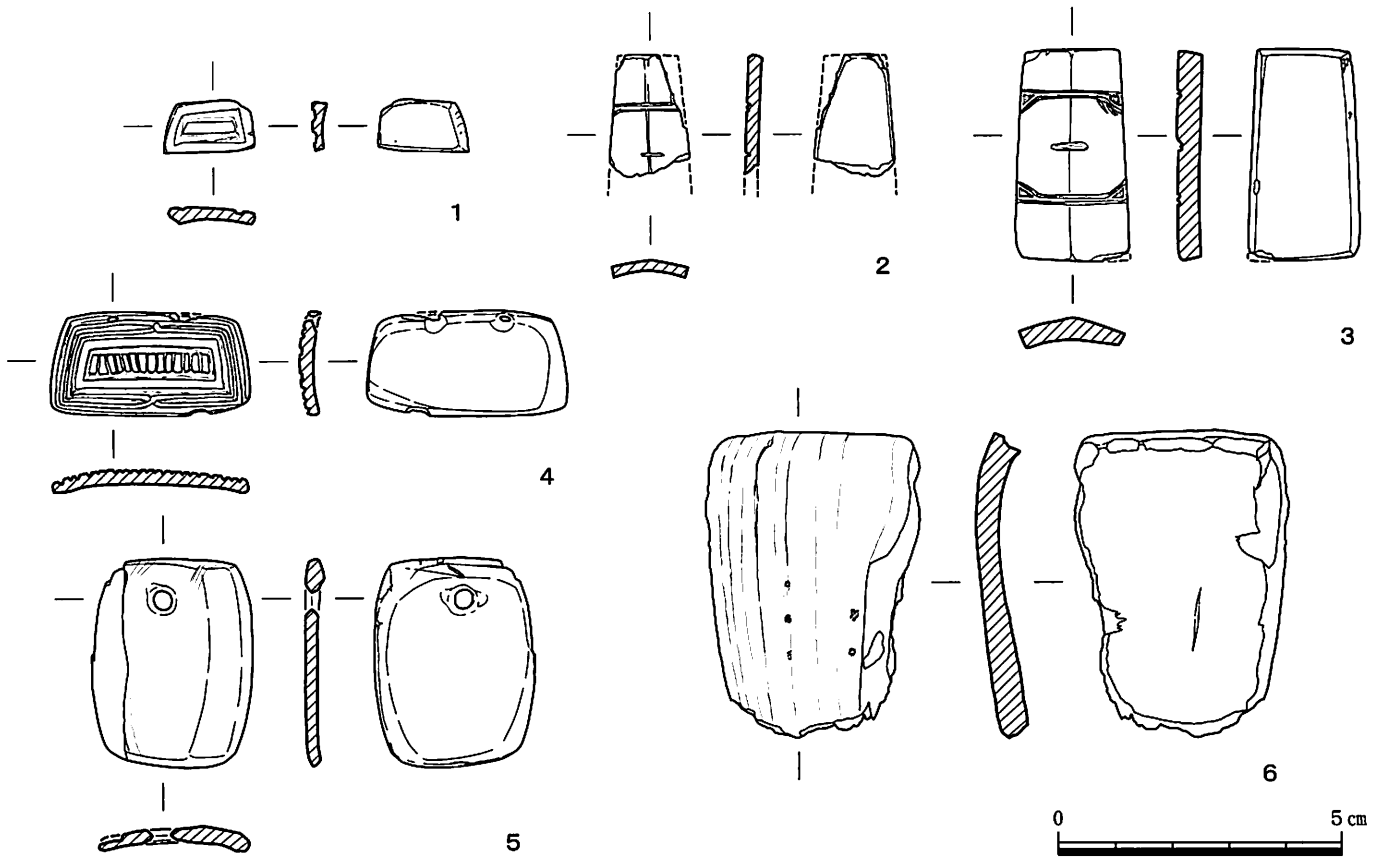


図7 ナガラ原東貝塚出土貝符と関連資料
1～3：表面採集品 4・6：IV層 5：V層

を示唆している。また、当製品は報告書中では文様の構成から広田上層タイプに位置づけられている（新里編2001）。しかし、横長台形の上辺に2つの孔を持つ点は広田下層タイプにみられる特徴である。文様構成からみても、中央部の縦位置の連続的帯文は、広田遺跡の下層埋葬であるC11号人骨やN1号人骨に共伴する貝符にみられる文様構成であり（桑原編2003）、上層タイプ貝符とする根拠にはならない。よって、当製品は山野分類の有文貝符Ⅱ類、木下分類の下層タイプii類、矢持分類のAⅡ-b類に相当する。類似する資料は広田遺跡の他に、久米島町清水貝塚（図6-44～48）や宇検村屋鈍遺跡（図6-41）、また名護市大堂原貝塚（図6-43）でも得られている。これらの資料は形態や孔の位置に加え、表面の文様を避けて凹部に孔を穿つ点も類似している。

図7-5は第6次調査の際、北1西1グリッドのV層で出土した（高松他編2010）。平面形は隅丸方形状を呈し、法量は長さ36mm、幅20～22mm、厚さ2mm、重量6gである。製品の上端中央には両側穿孔による孔が1つ設けられている。この孔には表側に1カ所、裏面に2カ所、計3カ所の紐ずれ痕跡があり、紐に通すなどして使用した様子が認められる。全体はわずかに摩耗しており、表面が一部剥落しているが、欠けた後に縁部を研磨している。また、表面には縦方向に弱い稜が走っており、3面の研磨面が認められる。当製品は無文の有孔製品のため、広田下層タイプ貝符に含まれ、山野分類の無文貝符無挾タイプ、木下分類の異形タイプb類に相当する。無文貝符で周囲に挟りがなく、孔が1点施される点では広田遺跡のA地区8号人骨共伴資料（図6-34）に類似するが、形態的には宜野湾市真志喜安座間原第一遺跡（図6-32）によく似る。また、縦位の稜線は琉球列島の無文貝符の多くに認められる特徴である。

図7-6は第5次調査の際に北3西1グリッドのIV層から出土した(楢編2003)。表面には大形イモガイ科のアンボンクロザメなどにみられる黒斑模様が認められ、製品はこの種の体層から螺塔にかけての部位である。法量は長さ53.5mm、幅30~35mm、厚さ4~6mm、重量20gである。全体形は縦長の台形に近く、側面はイモガイ科の成長線に沿って縦位に剥離しており、下部は破損している。製品上部はイモガイ科の螺塔部にあたり、螺塔部の上面は破損あるいは打割により割り取られた後に荒く研磨されている。また、製品内面に幅2mm以下の線刻が縦位1cm程走るが、人工的加工か判断が難しい。当製品は、貝符の素材となるアンボンクロザメである点、研磨や打割などの痕跡が認められる点から貝符の未成品である可能性が高い。このような貝符の製作技術に関連する資料は奄美市マツノト遺跡やフワガネク遺跡、宇検村屋鈍遺跡など奄美諸島に出土例が多い。

4.2 年代観の考察

それではナガラ原東貝塚で出土した貝符のうち図7-2~5について、貝符の編年観と同一包含層からの出土遺物を加味し、その年代観についての考察を行っていく。

図7-2・3は広田上層タイプ貝符である。広田遺跡上層埋葬は、木下による年代観では6世紀を主体とし、7世紀に一部入るとされている(木下2003)。一方、筆者は上層タイプ貝符の年代観を6世紀後半~9世紀初めとしている(山野2010b)。貝符は文様構成から、広田上層タイプ貝符の中でも中間型式に相当することがわかり(図1・3)、貝符の編年観からは少なくとも6世紀後半あるいは7世紀に入る資料と考えられる。また、これらは表面採集品だが、上面の多くが後世の攪乱を受けたⅢ層に帰属する可能性が高い。このことはIV層やV層からは上層タイプ貝符が出土しない点からも支持できる。Ⅲ層はアカジャンガー式土器を主体とする層で、C14年代測定では5世紀後半~7世紀前半の値が出ている(本書第1部第6章参照)。表面採集品のため明確ではないが、遺跡の現状と貝符の編年観を考慮すると当資料の年代観はおおよそ6世紀後半から7世紀代であると想定できる。

図7-4は広田下層タイプの有文貝符Ⅱ類で広田遺跡下層埋葬段階の第6・7段階と対応し、古墳時代中期~後期前半に位置づけられる。この貝符の出土したIV層はアカジャンガー式を主体としており、C14年代測定で5世紀後半~7世紀前半の値が出ている。広田遺跡の貝符の編年観から当資料はおおよそ5世紀から6世紀前半頃に位置づけられるが、後述するようにアカジャンガー式土器の編年観とは年代的ずれがある。

図7-5は広田下層タイプの無文貝符に類似例があり、広田遺跡下層埋葬段階の第3段階から第6段階に対応し、古墳時代初頭~中期頃の可能性がある。また、表面に研磨面を持つ貝符は、沖縄諸島の貝塚時代後期の大当原式土器を主体とする遺跡から出土している。よって貝符の年代観から当製品は弥生時代後期後半~古墳時代中期頃と想定できる。さらに当製品の出土したV層では九州からの搬入品である成川式土器の口縁部片が出土している。この土器片は形態や調整から古墳時代前期~中期前半に相当する(本書第Ⅱ部中村直子論文参照)。その他にもV層からは貝塚時代後期の奄美諸島に分布するスセン當式土器の口縁部が出土した。スセン當式はおおよそ古墳時代中期から後期に対応する(新里2008)。一方、C14年代測定では4世紀後半から~6世紀の年代値が出ており、貝符や成川式土器、スセン當式土器の年代観とおおよそ一致をみせる。

5. ナガラ原東貝塚出土貝符の編年的位置づけ

図8には、ナガラ原東貝塚の各層のC14年代測定値と各層から出土する主要遺物、これに広田遺跡の埋葬段階と貝符の年代観、奄美・沖縄諸島の従来の編年観を加えた図を掲載した(図8)。各層で出土した貝符は、スセン當式土器や成川式土器といった搬入土器の年代観、あるいはC14年代測定値

と大きな矛盾が生じない。また、当遺跡のⅣ層から刀子やゴホウラ製貝輪の失敗品が、Ⅴ層からはオオツタノハ製貝輪が出土している。このように本土、種子島、奄美諸島との関連性を伺わせる資料が散見でき、ナガラ原東貝塚のⅣ・Ⅴ層のある段階には各地域との間接的取引を行っていた可能性がある。また、各遺物の年代観を考慮すると、その背景に古墳時代の貝交易が推察できるのだ。しかし一方で、遺跡から出土した在地の土器である大当原式土器やアカジャンガー式土器の年代観とは少なからず不一致が認められる。

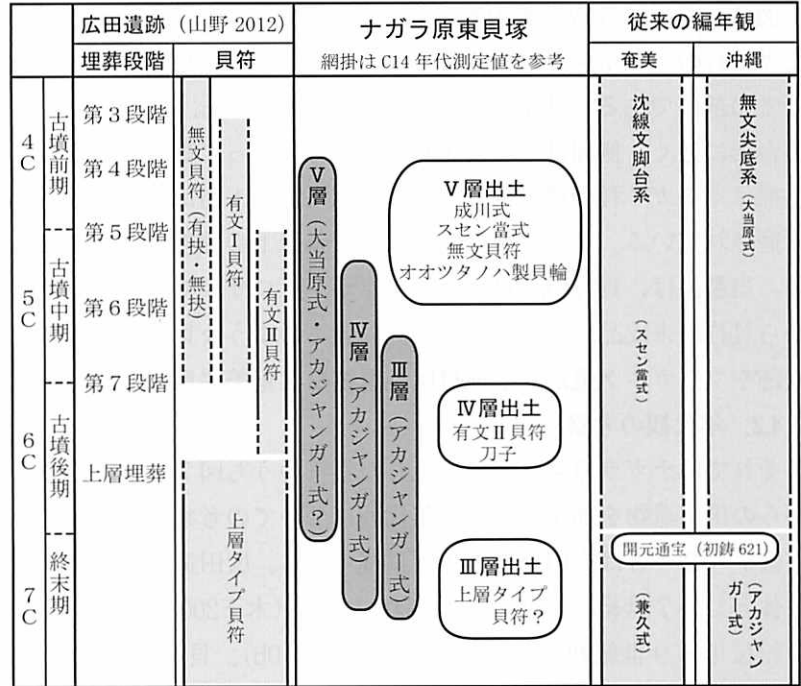


図8 ナガラ原東貝塚における従来の編年観との年代的誤差
(従来の編年観は新里2008を採用)

従来の編年観ではアカジャンガー式土器は7世紀前半が上限とされている(新里2008ほか)。しかし、アカジャンガー式土器が主体となる本遺跡のⅣ層では5~6世紀に相当する貝符が出土し、C14年代測定でも年代値は6世紀に集中する。つまり、遺物の出土状況とC14年代測定値からみたナガラ原東貝塚Ⅳ層における年代観は、貝塚時代後期の土器編年観との年代的誤差が生じているのである。この誤差の解消には3通りの考え方がある。

1つ目はアカジャンガー式土器の開始期が若干古くなるという見解である。アカジャンガー式土器は開元通宝(初鑄621年)との共伴事例をもって7世紀前半に上限が設定されている。しかし、これは年代を決定づける根拠となる遺物がこれまで開元通宝に限られていたことに起因する。近年の貝符の年代観を採用するならば、ナガラ原東貝塚Ⅳ層において認められるように少なくとも6世紀代にはアカジャンガー式土器(またはくびれ平底系土器)が出現していた可能性を考慮すべきである。

2つ目は広田下層タイプの有文貝符Ⅱ類の年代観が7世紀代まで新しくなるという考え方である。広田遺跡を含め、琉球列島では有文貝符Ⅱ類そのものの年代観を決定づける遺物との共伴事例は存在しない。また、沖縄諸島においては広田遺跡と比較して貝符型式が遅れて入ってきたか、あるいは長期にわたり存在したという可能性も考えられる。このような解釈により、少なくとも貝符と土器編年観の矛盾は解消される。しかし、本稿で示したように、奄美・沖縄諸島における貝塚時代後期の下層タイプ貝符の変化は広田遺跡と連動的であり、両地域の貝符に大きな時期幅は存在しないものとみられる。

3つ目は包含層の攪乱による遺物の混在に起因するという解釈である。ナガラ原東貝塚は包含層の不安定な砂丘上に形成されており、遺物が上下に混在しやすい環境にある。とくにⅢ層は後世の削平を受けて上面が攪乱されており、この攪乱が一部Ⅳ層にも及ぶ。また、Ⅲ~Ⅴ層の全ての層にくびれ平底系土器の底部だけでなく、尖底土器が出土する。この遺跡の堆積状況と土器の出土傾向を鑑みた際、断続的攪乱により、Ⅲ層からⅤ層の全ての層において大当原式土器とアカジャンガー式土器の混

在が起っていると解釈することもできる。このような認識をすることで、貝符や搬入土器も大当原式土器に伴う可能性があるかと推察でき、これら遺物間の年代的誤差は解消されるのである。しかし、本遺跡の遺物包含層全体を1つの包含層としてみたところで、本遺跡がアカジャンガー式土器を主体とする遺跡であることに変わりはなく、広田下層タイプ貝符やスセン當式土器、成川式土器など、古墳時代に相当する諸遺物が上下の層から相対的に出土している事実を、層の攪乱と遺物の混在によって全て説明することは危険である。

以上のようにナガラ原東貝塚で得られた貝符は、琉球列島における貝符編年や土器編年に対して大きな問題を投げかけている。現段階で結論づけることは困難であり、今後、琉球列島における貝符や土器の編年研究に加えて、当該時期の年代測定資料の充実や、砂丘地における遺物包含層の形成過程の解明など、多面的かつ理科学的な分析を重ねて行く必要がある。

本稿の分析により得られた結果は以下の通りである。

- ・ナガラ原東貝塚からは広田上層タイプの無孔貝符が3点、広田下層タイプの有文具符Ⅱ類が1点、広田下層タイプの無文具符が1点、貝符の未成品が1点得られた。
- ・無文具符には孔の周囲に明瞭な紐ずれ痕跡があり、廃棄される以前に人体などに装着されていた可能性がある。
- ・無孔貝符2点と無文具符には製品表面に稜線が走り、2面あるいは3面の研磨面を持つ。この加工は琉球列島の無文具符に顕著だが、当遺跡では例外的に上層タイプの無孔貝符に認められた。
- ・ナガラ原東貝塚における貝符の出土状況は、広田遺跡の年代観（山野2012）と整合性がとれる。また、各層におけるC14年代測定値とも大きな矛盾は認められない。
- ・遺跡からは、種子島との関係性を表す貝符あるいはオオツタノハ製貝輪、奄美諸島との関係性を表すスセン當式土器、九州以北との関係性を表す成川式土器や刀子、そしてゴホウラ製貝輪の失敗品など他地域との交流を示す文物が出土しており、その背景には古墳時代の貝交易がうかがえる。
- ・Ⅳ層のC14年代測定値と貝符を含めた各遺物の年代観は整合的だが、沖縄諸島の土器編年観とは年代的誤差が生じている。
- ・上記の原因として、①アカジャンガー式土器の年代観が従来より古くなる、②貝符の年代観が広田遺跡と沖縄諸島で異なる、③遺跡の包含層の攪乱と遺物の混在による、などの理由が考えられる。

謝辞

論文の執筆にあたり、多くの方から資料実見のご配慮と掲載許可を頂くと同時に、貴重なご意見を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

石堂和博、上原静、大城一成、大城剛、大堀皓平、片桐千亜紀、鐘ヶ江賢二、具志堅亮、甲元真之、小橋川剛、呉屋義勝、小脇有希乃、鳥袋春美、新里貴之、新里亮人、高梨修、徳嶺里江、仲宗根求、中島徹也、中原一成、中村直子、中山清美、藤尾慎一郎、西園勝彦、羽方誠、東和幸、松原哲志、宮城明恵、宮城伸一、宮城弘樹、盛本勲、山崎真治、山城直也、山城安生、山田浩久、山元謙一、奄美市立博物館、奄美市歴史民俗資料館、糸満市教育委員会、うるま市教育委員会、沖縄国際大学考古学研究室、沖縄県立埋蔵文化財センター、鹿児島県立埋蔵文化財センター、鹿児島県立歴史資料センター黎明館、宜野湾市立博物館、熊本大学考古学研究室、久米島自然文化センター、国立歴史民俗博物館、中種子町教育委員会、名護市教育委員会、北谷町教育委員会、本部町教育委員会、読谷村教育委員会（五十音順・敬称略）

第Ⅱ部

注

- (1) 鉄器のような鋭利な利器を用いて彫ることで文様を刻む「彫刻」に対し、擦切具を用い擦ることで文様を刻む行為を「擦刻」と呼ぶ(山野2010a)。
- (2) 別稿では、7つの下層埋葬群に伴う搬入土器やガラス玉、貝製品などを用いて、各段階に年代観を与え、「段階」として扱った。第1・2段階は中津野式土器の共伴を理由に弥生時代終末期～古墳時代初頭とし、第3段階は古墳時代初頭～前期前半、第4段階は古墳時代前期前半～前期後半、第5段階はガラス玉の出現を理由に古墳時代前期後半～中期前半、第6段階は九州以北で出土する列点文具釧を理由に古墳時代中期前半～中期後半、第7段階は上層埋葬への移行期であり古墳時代中期後半～古墳時代後期とした。ただし、遺物の共伴は一定の時期を与えるものにすぎず、設定した年代観は、各段階の年代幅を決定するものではない暫定的な年代観である。
- (3) 広田遺跡の報告書中では上層タイプ貝符の時期は古墳時代後期が主体で7世紀を含むとしている(木下2003、矢持2003)。
- (4) 木下は広田遺跡で出土する貝符を「下層タイプ」、「上層タイプ」、「異形タイプ」の大きく3つに分類している(木下2003)。下層タイプは、第一次調査下層出土の貝符を基準に、下層・中層人骨に伴った貝符である。一方、木下による異形タイプは表面に彫刻をもたない貝符のことを指す。しかし、これら無文の貝符は、第三次調査の下層埋葬にあたるD I地区5号人骨やA地区10号人骨でも共伴している(桑原編2003)。このことから、無文具符を下層タイプの中で異なる形の貝符として区別するのは適切とはいえない。よって本稿における「広田下層タイプ貝符」の定義は下層埋葬(広田遺跡の第一次調査におけるⅣ・Ⅴ層中の埋葬遺構)に含まれる貝符であり、この中に有文具符と無文具符(木下の異形タイプ)、また広田遺跡N2号人骨で検出された無孔貝符を含む。
- (5) 琉球列島以北で貝符に類する資料として鹿児島県日置市黒川貝塚の阿高式期の巻貝製装飾品が上げられる。資料は写真により報告されており、形態や孔、紐通し溝など貝符に共通する加工が認められる(河口1981)。本土ではこのような貝製品はほぼ出土しないため、琉球列島と本土を繋ぐ重要な遺物である可能性もある。

文献

- 旭 慶男・弥栄久志編 1987『長浜金久遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(42) 鹿児島県教育委員会
- 伊藤慎二 2000『琉球縄文文化の基礎的研究 未完成考古学叢書』2 株式会社ミュゼ
- 伊藤慎二 2008『琉球縄文土器(前期)』『総覧 縄文土器』pp.814～821 『総覧 縄文土器』刊行委員会
- 石堂和博・徳田有希乃・山野ケン陽次郎編 2007『広田遺跡』南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(15) 南種子町教育委員会
- 上原 静 1985『資料紹介 野国貝塚採集の蝶形貝札』『南島考古だより』第32号 沖縄考古学会
- 沖縄県教育委員会編 1982『古座間味貝塚』沖縄県文化財調査報告書34 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育委員会編 1992『新空港・空港拡張建設計画予定地内の遺跡』沖縄県文化財調査報告書第106集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育庁文化課編 1985『伊江島具志原貝塚の概要』沖縄県文化財調査報告書第61集 沖縄県教育委員会
- 沖縄考古学会編集 2004『南島考古』No.23 沖縄考古学会
- 金岡丈夫 1975『種子島広田遺跡の文化』『発掘から推理する』pp.94～115 朝日新聞社
- 河口貞徳 1981『3. 鹿児島県黒川洞穴』『河口貞徳古稀記念著作集』上巻 pp.35～53 河口貞徳先生古稀記念著作集刊行会
- 河口貞徳・出口浩・本田道輝 1978『サウチ遺跡』『鹿児島考古』12号 pp.1～159 鹿児島県考古学会
- 木下尚子 1987『貝符』『弥生文化の研究』第8巻 pp.198～206 雄山閣
- 木下尚子 1992『南島出土の貝符文様の系譜』『考古学ジャーナル』No.352 pp.8～14 ニューサイエンス社

- 木下尚子 1996『南島貝文化の研究－貝の道の考古学－』法政大学出版
- 木下尚子 2003「貝製装身具からみた広田遺跡」『広田遺跡発掘調査報告書』pp.329～366 広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館
- 木下尚子 2005「貝交易からみた異文化接触」『考古学研究』52-2(206号) pp.25～41 考古学研究会
- 金武正紀編 1980「宇堅貝塚群・アカジャンガー貝塚」具志川市教育委員会
- 金武正紀・大城慧編 1980「浜崎貝塚」伊江村文化財調査報告書第9集 伊江村教育委員会
- 具志川市教育委員会編 1978「具志川市遺跡分布調査概報」具志川市教育委員会
- 桑原久男編 2003「広田遺跡発掘調査報告書」広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館
- 国分直一・盛園尚孝 1958「種子島南種子町広田の埋葬 遺跡調査概報」『考古学雑誌』第43巻 三号 pp.1～31 日本考古学会
- 柴田 亮編 2012「ナガラ原東貝塚8」『考古学研究室報告』第47集 pp.1～50 熊本大学文学部考古学研究室
- 島袋 洋編 1996「平敷屋トウバル遺跡－ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書－」沖縄県文化財調査報告書第125集 沖縄県教育委員会
- 新里亮人編 2001「I ナガラ原東貝塚3」『考古学研究室報告』第36集 pp.1～70 熊本大学文学部考古学研究室
- 新里亮人・山野ケン陽次郎 2008「徳之島伊仙町喜念浜採集の貝製品について」『南島考古だより』第84号 沖縄考古学会
- 新里貴之 1999「南西諸島における弥生並行期の土器」『人類史研究』11 pp.75～106 人類史研究会
- 新里貴之 2000「九州・南西諸島における弥生時代・並行期の土器移動について－基礎的作業－」『大河』第7号 pp.237～257 大河同人
- 新里貴之 2005「南西諸島における先史時代の墓制（I）－大隅諸島－」『地域政策科学研究』第2号 pp.53～86 鹿児島大学大学院人文社会科学部研究科
- 新里貴之 2008「琉球縄文土器（後期）」『総覧 縄文土器』pp.822～829 株式会社アム・プロモーション
- 高梨 修編 2007「小湊フワガネク遺跡群II」奄美市文化財調査報告書一 奄美市教育委員会
- 高松あゆみ・弘中正芳編 2010「ナガラ原東貝塚6」『考古学研究室報告』第45集 pp.1～52 熊本大学考古学研究室
- 高宮廣衛 1969「恩納村熱田貝塚調査概報」『沖大論叢』第9巻 第1号 pp.323～365 沖縄大学
- 高宮廣衛・知念勇編 2004「考古資料大観12 貝塚後期文化」小学館
- 多和田真淳・外間正幸・嵩元政秀 1962「地荒原貝塚」『沖縄文化財調査報告』pp.351～362 那覇出版社
- 植 佳克編 2003「I ナガラ原東貝塚5」『考古学研究室報告』第38集 pp.1～74 熊本大学文学部考古学研究室
- 樋泉岳二・島袋春美・村上恭通・西野望・新里亮人・中村友昭・中山清美・福永修一・西園勝彦編 2006「マツノト遺跡」笠利町文化財調査報告第28集 笠利町教育委員会
- 中園 聡 1992「これは山の字ではない－考古学的解釈の性質に関して－」『人類史研究』第8号 pp.17～36 人類史研究会
- 中村 愿 1994「第二章 先史時代の北谷」『北谷町史 第一巻 通史編』北谷町教育委員会
- 名嘉真武夫・安里嗣淳他編 1979「伊江島ナガラ原西貝塚」伊江村文化財調査報告第8集 伊江村教育委員会
- 中山清美編 1995「見用崎遺跡」笠利町文化財報告第20号 笠利町教育委員会
- 西園勝彦編 2009「屋鈍遺跡」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(143) 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 橋口達也編 1996「鳥ノ峰遺跡」中種子町埋蔵文化財調査報告書(2) 中種子町教育委員会・鳥ノ峯遺跡発掘調査団
- 宮城伸一・東當美和編 2005「津堅貝塚」勝連町の文化財第23集 勝連町教育委員会
- 盛本勲・西銘章・比嘉優子編 1995「北原貝塚発掘調査報告書」沖縄県文化財調査報告書第123集 沖縄県教育委員会

第Ⅱ部

- 盛本勲編 1989『清水貝塚発掘調査報告書』具志川村文化財調査報告書第1集 沖縄県具志川市教育委員会
- 矢持久民枝 2003「広田遺跡出土貝符の検討－その分類と編年－」『広田遺跡発掘調査報告書』 pp.311～328 広田遺跡学術調査研究会・鹿児島県立歴史資料センター黎明館
- 山野ケン陽次郎 2010a「琉球列島出土彫画貝製品の製作技術に関する研究」『熊本大学社会文化研究』 8 pp.317～332 熊本大学大学院社会文化科学研究科
- 山野ケン陽次郎 2010b「広田上層貝符に関する一考察」『南島考古』 第29号 pp.33～50 沖縄考古学会
- 山野ケン陽次郎 2012「種子島広田遺跡の再検討」『古代文化』 第63巻第4号 pp.6～26 古代学協会

挿図出典

図1：木下1987を縮小転載 図2：木下1992を縮小転載 図3：矢持2003を縮小転載 図4：山野2012を縮小転載
図7：1～6は熊本大学考古学研究室にて筆者が実測し、デジタルトレースを行なった。表1・図5・図8：筆者作成 図6：9・26・32・34・39を除いた全てを各保管場所で筆者が実測し、デジタルトレースを行なった。1・2・12・13・27・37は鹿児島県歴史資料センター黎明館、3は国立歴史民俗博物館、4・16・18・20・22～24・35は沖縄県埋蔵文化財センター、5・14・19・21・29は読谷村歴史民俗資料館（転載する際は読谷村教育委員会の許可が必要）、6・36は奄美市歴史民俗資料館、7・8は中種子町歴史民俗資料館、9は木下1996を再トレース、10は奄美市立博物館（新里・山野2008に掲載したものを、木下尚子先生の指摘を受け、復元部分に訂正を加えた）、11・28・31は伊江村教育委員会、15は沖縄国際大学考古学研究室、17・40はうるま市教育委員会、25は沖縄県立博物館・美術館、26は多和田他1962を再トレース、30・41は鹿児島県立埋蔵文化財センター、32・39は宜野湾市教育委員会より提供頂いた実測図をデジタルトレースしたもの（転載する際は宜野湾市教育委員会の許可が必要）、33・42は熊本大学考古学研究室、34は桑原編2003を再トレース、38は北谷町教育委員会、43は名護市教育委員会（転載する際は名護市教育委員会の許可が必要）、44～48は久米島自然文化センター、49は宜野湾市教育委員会